

|         |         |
|---------|---------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 190 |
| 区分      | 治療論・治則  |
| タイトル    | 治則論     |
| 著者      | 八木素萌    |
| 作成日     | 1990.04 |

◎『素問』『靈樞』『難經』を主として、それらの經典の治則に関する主要な記述から、治則について学ぶ事とする。

▲「～聖人不治已病 治未病 不治已乱 治未乱 此之謂也 夫病已成而後藥之 乱已成而後治之 譬猶渴而穿井 鬪而鑄錐 不亦晚乎～」(『素問』四氣調神大論第2)

◇渴而穿井：喉の渴きを覚えてから井戸を掘り始める事

◇鬪而鑄錐：戦闘が始まってから武器の鑄造を始める事

▲「～善治者治皮毛 其次治肌膚 其次治筋脈 其次治六府 其次治五臟 治五臟者 半死半生也～」(『素問』陰陽応象大論第5)

▲「～先病而後逆者治其本 先逆而後病者治其本 先寒而後生病者治其本 先病而後生寒者治其本 先熱而後生病者治其本 先熱而後生中滿者治其標 先病而後泄者治其本 先泄而後生他病者治其本 必且調之 乃治其他病 先病而後中滿者治其標 先中滿而後煩心者治其本 人有客氣有同氣 小大不利治其標 小大利治其本 病發而有余 本而標之 先治其本 後治其標 病發而不足 標而本之 先治其標 後治其本 謹察間甚 以意調之 間者并行 甚者独行 先小大不利而後生病者治其本～」(『素問』標本病伝論第65)

◇客氣・同氣：「同」を全元起の本では「固」とする、諸註家で解釈が異なっている。張介賓は「客氣とは変化して行く運氣のこと、同氣とは、年々同様に巡って来る四時之主氣の事」と言う、馬玄台は「元々異質の病が相伝して現われた者を客氣と言うが、二つの病が相似の氣であった者が相互に伝変し相染した者が同氣と言う」と言う、張志聡は「客氣とは天の六氣を言い、身体にあって此れと同調し共鳴する六氣を同氣と言う」と註する。『内難經選釈』の閻洪臣・高光震は「此の部分は文体が異質であるから衍文であるようだから削除する方が良い」と書いている。

◇間者并行：軽症の場合には「標」と「本」とを兼治する。

◇甚者独行：重病の場合には、病の「枢要な問題」＝「主要矛盾」に対してズバリと、「本」か「標」かを見定めて治療する。

▲「～從内之外者 調其内 從外之内者 治其外 從内之外而盛於外者 先調其内而後治其外 從外之内而盛於内者 先治其外而後調其内 中外不相及 即治主病」(『素問』至真要大論第 74)

▲「～故曰病之始起也 可刺而已 其盛 可待衰而已 故因其輕而揚之 因其重而減之 因其衰而彰之 形不足者 溫之以氣 精不足者 補之以味 其高者 因而越之 其下者 引而竭之 中滿者 瀉之於内 其有邪者 瀉形以為汗 其在皮者 汗而發之 其慄悍者 按而收之 其実者 散而瀉之 審其陰陽 以別柔剛 陽病治陰 陰病治陽 定其血氣 各守其鄉 血実宜決之 氣虚宜掣引之」(『素問』陰陽応象大論第 5)

◇越：泄越の事、吐法の事。

◇瀉之於内：王冰の註に「内謂腹内」とあり、中焦の満は具体的には胸脅苦満、心下痞、結胸などである。基本治法は和法であり正しく施治されれば二便は自然に通じる。

◇慄悍者：王冰の註に「慄疾也悍利也」と言う。

◇掣：王冰註に「掣読為導 導引則氣行条」とある。

▲「～損其肺者 益其氣 損其心者 調其榮衛 損其脾者 調其飲食 適其寒温 損其肝者 緩其中 損其腎者 益其精 此治損之法也」(難經・十四難)

▲「～見肝之病 則知肝当伝之於脾 故先実其脾氣 無令得受肝之邪 故曰治未病焉～」(難經・七十七難)

▲「～不得氣 乃与男外女内 不得氣 是謂十死不治也」(難經・七十八難)

▲「～五臓已定 九候已備 後乃存鍼～」(『素問』宝命全形論第 25)

▲「～無刺大醉 令人氣乱 無刺大怒 令人氣逆 無刺大勞人 無刺新飽人 無刺大饑人 無刺大渴人 無刺大驚人～」(『素問』刺禁論第 52)

▲「～氣実者 熱也 氣虚者 寒也～」(『素問』刺志論第 53)

▲「～刺実須其虚者 留鍼陰氣隆至 乃去鍼也 刺虚須其実者 陽氣隆至 鍼下熱乃去鍼也 經氣已至 慎守勿失者 勿變更也～」(『素問』鍼解第 54)

▲「～故天之邪氣感 則害人五臓 水穀之寒熱感 則害於六腑 地之湿氣感 則害皮肉筋脈 故善用鍼者 從陰引陽 從陽引陰 以右治左 以左治右 以我知彼 以表知裏 以觀過与不及之理 見微得過 用之不衰～」(『素問』陰陽応象大論第 5)

- ▲「～経病者治其経 孫絡病者治其孫絡血 血病身有痛者治其経絡 其病者在奇邪 奇邪之脈 則繆刺之 留瘦不移 節而刺之 上実下虚 切而從之 索其結絡脈 刺出其血 以見通之～」(『素問』三部九候論第 20)

◇留瘦不移：王冰註に「病氣淹留形容減瘦証不移易則消息節級養而刺之～」とある。

- ▲「～寒者熱之 熱者寒之 微者逆之 甚者從之 堅者削之 客者除之 勞者温之 結者散之 留者攻之 燥者濡之 急者緩之 散者収之 損者温之 逸者行之 驚者平之 上之下之 摩之浴之 薄之劫之 開之発之 適事為故……何謂逆從……逆者正治 從者反治 從少從多 觀其事也～」(『素問』至真要大論第 74)

◇客：客氣・同気の客と解す。

◇逆者正治 從者反治：熱用寒藥を正治とし、從は佐藥に熱藥を加えて君藥の正治を助勢する事。

◇從少從多：少は一從二逆の配藥、多は二從一逆の配藥の事を指す。つまり反佐藥の多少を云う。

- ▲「～治寒以熱 治熱以寒 而方士不能廢繩墨 而更其道也 有病熱者 寒之而熱 有病寒者 熱之而寒 二者皆在 新病復起 奈何治 岐伯曰 諸寒之而熱者取之陰 熱之而寒者取之陽 所謂求其属也～」(『素問』至真要大論第 74)

◇方士不能廢繩墨：方士は術者＝医師、繩墨は「スミナワ」＝基準・尺度を指している。

- ▲「～今風寒客於人 使人毫毛畢直 皮膚閉而為熱 当是之時 可汗而発也或痺不仁腫痛当是之時 可湯熨及火灸刺而去之」(『素問』玉機真藏論第 19)

「中医学書」の「治則」に関する引用を見ると、前後の文脈から切り放しているものが多い。これは学問的には正しく無い。原典に当たり直した。『靈樞』は具体的治療と密着していて引用には不適當であった。『素問』にも同様の記述が極めて多い。